みどりの文化賞の概要

１　概要

国土緑化推進機構は、平成２年、国民の祝日「みどりの日」が制定されたことを記念し、緑豊かな国土と新しい森林文化の創造に役立てるため、緑や森林に関して顕著な功績のあった者（個人または団体）を顕彰する「みどりの文化賞」を創設しました。

２　選考方法

幅広い分野の学識経験者等で構成する「みどりの文化賞選考委員会」において、選考基準を定めています。

選考基準に基づき、選考委員会が指名する「みどりの文化賞候補者推薦人」等から顕著な功績のあった者の推薦を受け、選考委員会において「みどりの文化賞」にふさわしい者を審査・選考し、受賞者を決定しています。

３　表彰

「みどりの月間」中に開催される「みどりの感謝祭」の式典において表彰します。

みどりの文化賞受賞者には、

①　みどりの感謝祭名誉総裁名（皇族殿下）の表彰状

②　国土緑化推進機構会長の賞牌及び副賞

が授与されます。

４　今後のスケジュール

４月中旬　　プレスリリース

５月１３日（土）　表彰式（みどりの感謝祭式典・イイノホール）（予定）

みどりの文化賞選考委員

平成５年３月３１日現在

（五十音順：敬称略）

青　山　佳　世	フリーアナウンサー
今　井　通　子	国際自然・森林医学会会長 東京農業大学客員教授
倉　本　　聰	脚本家 NPO法人富良野自然塾塾長
佐々木　惠　彦	日本学士院会員 緑の循環認証会議会長
渋　澤　寿　一	NPO法人共存の森ネットワーク　理事長
滑志田　　隆	毎日新聞社　元社会部編集委員
箕　輪　光　博	東京大学　名誉教授
宮　田　亮　平	前文化庁長官
宮　林　茂　幸	東京農業大学　客員教授

「みどりの文化賞」のこれまでの受賞者

第１回　　戦後の森林造成と国土緑化
　　（受賞者）徳川宗敬　氏　（故人への顕彰）

第２回　　木の文化の継承、発展に貢献した者
　　（受賞者）西岡 常一 氏

第３回　　森林と水との関わりを社会にひろめる
　　（受賞者）財団法人　水利科学研究所（団体）

第４回　　森林と水の守り手、山村を支える
　　（受賞者）黒澤 丈夫 氏（個人　群馬県上野村長）

第５回　　森林と水の守り手、山村を支える
　　（受賞者）宮崎県諸塚村（団体）

第６回　　ボランティア活動による森林づくり
　　（受賞者）草刈り十字軍（団体）

第７回　　持続的森林経営をめざす森林づくり
　　（受賞者）高橋 延清　氏

第８回　　大都会のなかでの自然豊かな森林づくり
　　（受賞者）明治神宮の森（団体）

第９回　　海を蘇らせた森林づくり
　　（受賞者）えりも岬の緑を守る会（団体）

第１０回　「森林文化」の新たな展開
　　（受賞者）筒井 迪夫　氏

第１１回　民間公益団体による緑化活動支援
　　（受賞者）ゴルファーの緑化促進協力会（GGG）（団体）

第１２回　上下流の協力による森林づくり（団体）
　　（受賞者）（財）矢作川水源基金

第１３回　国際緑化活動の推進
（受賞者）神足　勝浩　氏

第１４回　地方自治による山村活性化への取り組み
（受賞者）松形　祐堯　氏

第１５回　国民参加の森林づくり運動の推進
（受賞者）高木　文雄　　氏

第１６回　民間団体等による「国民参加の森林づくり」運動支援
（受賞者）株式会社　ローソン（ローソン緑の募金）（団体）

第１７回　森林を活かし、木の文化の伝承に貢献した者
（受賞者）小原　二郎　氏

第１８回　森林文化を未来に引き継ぐ森林管理
（受賞者）神宮司庁営林部（伊勢神宮宮域林）（団体）

第１９回　民間団体による国際緑化活動の推進
（受賞者）（財）オイスカ（団体）

第２０回　森林と人との豊かな関わりを目指して
（受賞者）北村　昌美　氏

第２１回　伝統の技が生み出す木の文化
（受賞者）田中　文男　氏

第２２回　「水と緑と土」は、豊かな自然の原点
（受賞者）富山　和子　氏
さくらは日本のシンボル～大震災からの復興の励みに～
（受賞者）佐野　藤右衛門　氏

第２３回　日本の山から明るく豊かな展望の到来を願って
（受賞者）島﨑　洋路　氏

第２４回　「森林(もり)森林(もり)の力を地域の力に」の実現を目指して
（受賞者）中越　武義　氏（個人　元高知県梼原村長）

第２５回　「森は海の恋人」運動の実践を通じ豊かな日本の未来を目指して
（受賞者）　畠山　重篤　氏

第２６回　「森の再生」と「心の再生」－豊かな森が持つ可能性を信じて－
（受賞者）Ｃ．Ｗ．ニコル　氏
地域資源とその機能を最大限に活用した地方創生
（受賞者）岩手県　葛巻町（団体）

第２７回　再生産可能な未来のエネルギーの礎を築く
－木質バイオマス利用と農山村の振興への願いを込めて
（受賞者）熊崎　実　氏

第２８回　森が育む幼児の力
（受賞者）佐藤　清太郎　氏
ＮＰＯ法人森のようちえん全国ネットワーク連盟（団体）

第２９回　森林科学の未来を拓く
（受賞者）木平 勇吉 氏

第３０回　私は森林の案内人
（受賞者）田中　惣次　氏

第３１回　市民・女性の視点で森林づくりを広める
（受賞者）池谷　キワ子　氏

「みどりの文化賞」のこれまでの受賞者・受賞内容の概要等

第１回（平成２年）

戦後の森林造成と国土緑化

（受賞者）徳川宗敬　氏　（故人）

故徳川宗敬氏は、早くから緑の大切さに思いを寄せ、愛林思想の普及に努め、特に終戦時の森林が荒廃の極みにあることを憂い、国土の復興のためには緑をよみがえらせることが急務であり、「荒れた国土に緑の晴れ着を」を合言葉に、国土緑化のための国民運動を提唱し、昭和２２年「森林愛護連盟」を結成するなど、終生、わが国の国土緑化運動の指導者として活躍された。

第２回（平成３年）

木の文化の継承、発展に貢献した者

（受賞者）西岡 常一 氏

西岡常一氏は、宮大工として、我が国の木造建築を代表する法隆寺、薬師寺等の再建に従事し、飛鳥の木匠の技術を解明して、その技術を後生に伝える基礎を築いた。

木材を豊富に用いて伽藍の建築を行う宮大工として、木の伝統技術の継承・発展に貢献すると共に、木の文化の思想を人々に伝える上で大きな役割を果たした。

第３回（平成４年）

森林と水との関わりを社会にひろめる

（受賞者）財団法人　水利科学研究所

（財）水利科学研究所は、河川利用、治山治水、農業用水、工鉱業用排水及び水の法律制度に関する数多くの調査研究を実施し、その成果等を公刊し、水の利用に関する知識の普及啓発等を図るとともに、森林と水との関わりを広く社会にひろめることに大きな役割を果たした。

第４回（平成５年）

森林と水の守り手、山村を支える（個人）

（受賞者）黒澤 丈夫 氏（群馬県上野村村長）

黒澤丈夫氏は、昭和４０年村長に就任以来、健康水準・道徳水準・知識水準の向上を村政の目標に掲げ、自然と生活が調和した「美しい山村」の建設を目指し、ハード・ソフトの両面から、数多くの施策や事業の実施に取り組み、村民の意識改革・村の活性化に努め、山村の地域振興に指導的立場で取り組み、全国の山村地域を勇気づける大きな役割を果たした。

第５回（平成６年）

森林と水の守り手、山村を支える（団体）

（受賞者）宮崎県諸塚村

高密度林道網の整備による除間伐の推進など、適切な森林の維持管理、小径木・間伐材の有効利用、しいたけ生産や畜産、茶栽培などとの複合経営、将来にわたる森林の維持管理に必要な若手・担い手確保を目指す「諸塚村国土保全森林作業隊」の創設など、人づくり、地域産業の振興、自然環境の保全などを推進してきており、山村振興の優良なモデルとして高く評価されている。

第６回（平成７年）

ボランティア活動による森林づくり

（受賞者）草刈り十字軍

山村の過疎化が進む中で、森林を健全に守り育てていくためには、ボランティア活動を含めた幅広い国民参加型の森林づくり運動が重要であり、「草刈り十字軍」は、わが国の「ボランティア活動による森林づくり」の草分け的存在であり、各地への波及効果を含め、優れた活動実績とともに、地域の青年等との文化交流を行うなど他の模範となっている。

第７回（平成８年）

持続的森林経営をめざす森林づくり

（受賞者）高橋 延清　氏

高橋延清氏は、東京大学演習林（北海道富良野市）の経営に長きにわたり携わる中で、森林が教室であるとして現地の森林づくりの研究と実践に努めてきた。

自然の力を基本とする「林分施業法」の技術体系による、林業生産と環境保全を並列、発展しうる森林づくりを実現した。

この技術は、保全と利用の調和、資源の保続的循環、生物多様性の確保等、優れた機能を持つ技術体系として高く評価されている。

第８回（平成９年）

大都会のなかでの自然豊かな森林づくり

（受賞者）明治神宮の森

「明治神宮の森」は、七十数年前、当時の林学者や造園の専門家たちが英知を尽くして構想・計画された「人工の森」であるが、自然の植生遷移に習い、百年後に極相林（安定林）に移行するよう設計されている。大都市にあって、約７０㌶に及ぶ自然豊かな森林として世界に誇れるものである。

第９回　（平成１０年）

海を蘇らせた森林づくり

（受賞者）えりも岬の緑を守る会

えりも岬の緑化の歩みは、長年にわたる「えりも岬の緑を守る会」を構成する地元住民と営林署との協力と様々な研究や創意工夫の歴史の中で造成されてきたものであり、その活動は住民参加による「海を蘇らせた森林づくり」の全国的なモデルとなっている。

第１０回（平成１１年）

「森林文化」の新たな展開

（受賞者）筒井 迪夫　氏

筒井迪夫氏は、東京大学の教官として「林政学」「森林文化学」の研究・教育に従事し、専門分野で多様な研究成果を挙げるとともに、人材の育成に大きく貢献した。学術的な研究・調査活動に加え「森林文化」の定着や森林環境教育推進のために実践的に取組み、幅広い実績をあげており「森林文化」の新たな展開にふさわしい活動となっている。

第１１回（平成１２年）

民間公益団体による緑化活動支援

（受賞者）ゴルファーの緑化促進協力会（GGG）

ゴルファーの緑化促進協力会は、昭和５１年「ゴルファーの善意による社会公共施設の緑化」をキャッチフレーズに設立。都道府県緑化推進委員会や国立公園関係団体などの緑化団体を通じて、社会公共施設の緑化事業を推進。国民一人一人が可能な方法で緑化活動に参加する国民運動として、協力会の活動は、今後の民間公益団体による緑化活動推進モデルとなっている。

第１２回（平成１３年）

上下流の協力による森林づくり

（受賞者）（財）矢作川水源基金

上下流の市町村が協力して水源地の森林を保全することを目的に、昭和５３年、基本財産約６億円で基金を設立。

上流域森林の路網整備、植林などのきめ細かな森林整備事業を行うとともに、上下流の住民参加による森林整備作業の体験、シンポジュームの開催などによる森林・水問題についての地域社会への普及啓発活動など、「流域は運命共同体」との考え方に基づく上下流が一体となって森林整備活動に取り組む全国のモデルである。

第１３回（平成１４年）

国際緑化活動の推進

（受賞者）神足　勝浩　氏

神足勝浩氏は、昭和４９年、国際協力事業団（JICA）の設立に当たり林業開発協力部の設立に尽力され、同事業団による森林・林業の国際協力事業が本格的に開始された。同氏の関わったフィリピンの造林プロジェクトでは８、０００㌶に及ぶ世界に類を見な

い森林造成を成功させるなど、今日の我が国の森林・林業部門での国際協力の基盤を築いた。

第１４回（平成１５年）

地方自治による山村活性化への取り組み

（受賞者）松形　祐堯　氏

松形祐堯氏は、木材需要拡大や林業の担い手対策などの森林・林業振興策に加え、森林と人間が共生する森林理想郷づくりを目指す「フォレストピア宮崎構想」、森林や農地の有する国土保全などの公益的機能を積極的に評価する観点から、農山村地域の活性化を図る「国土保全奨励制度」を全国に向けて発信しており、「地方自治による山村活性化への取り組み」の全国的なモデルである。

第１５回（平成１６年）

国民参加の森林づくり運動の推進

（受賞者）高木　文雄　　氏

高木文雄氏は、昭和５８年（財）森とむらの会を設立し会長に就任。各界を代表する有識者・文化人により設立された同会は、我が国の森とむらの問題を、環境、国土保全、教育、文化、芸術など幅広い見地からの政策提言を行うとともに、昭和６１年には、「２１世紀の森林づくり委員会」による「２１世紀へ一国民参加の森林づくり」を取りまとめ、「国民一人ひとりが自らできる方法で森林づくり」との考え方を提起した。その後の我が国の国土緑化運動の指針となっている。

第１６回（平成１７年）

民間団体等による「国民参加の森林づくり」運動支援

（受賞者）株式会社ローソン（ローソン緑の募金）

（株）ローソンは全国約８、０００店舗に設置された募金箱に寄せられた募金を（社）国土緑化推進機構を通じ、国民参加の森林づくり運動推進に当たっての普及啓発及び国内・外の森林整備活動の支援に幅広く活用されている。

また、各地域の店舗社員等と地域ボランティアと共に様々な森林整備活動に取り組んでおり、「国民参加の森林づくり運動支援」の活動の先駆けとして高く評価される。

第１７回（平成１８年）

森林を活かし、木の文化の伝承に貢献した者

（受賞者）小原　二郎　氏

我が国の伝統的な木の文化の技術を人々の生活に生かすため、多年にわたり日本の住宅産業や建築界に対して自然素材としての木材の活用の重要性を訴え、森林・木材の分野と建築・住宅産業の分野との橋渡しの役割を果たすなど、「木の文化の伝承」活動を実践してきている。

第１８回（平成１９年）

森林文化を未来に引き継ぐ森林管理

（受賞者）神宮司庁営林部（伊勢神宮宮域林）

神宮司庁営林部は、神宮の尊厳を守るための風致景観の維持増進、水源のかん養、式年遷宮の御用材の供給体制確立等を目的に、約５、５００㌶の神宮宮域林を管理。

神宮神域をとりまく森林の保全をはかり、風致の増進と水源のかん養を基本にしつつ、長期的な視点に立って御用材供給を目指す取り組みは、森林文化を未来に引き継ぐ森林管理のモデルとなっている。

第１９回（平成２０年）

民間団体による国際緑化活動の推進

（受賞者）（財）オイスカ

森林の大切さやその役割、植林を通じた国際協力の重要性を幅広く国民に啓発するとともに、アジア太平洋地域の人々が自発的に取り組む植林活動への協力・支援、海外植林ボランティアの派遣、植林プロジェクトの支援費調達のため募金活動や啓発活動を積極的に展開。これまでの海外での植林面積は１万１千㌶に及ぶ 。

約３０年に及ぶ海外での緑化活動の歴史と幅広いネットワークをもつ（財）オイスカは、国際緑化活動をリードする NGO である。

第２０回（平成２１年）

森林と人との豊かな関わりを目指して

（受賞者）北村 昌美 氏

各国住民の森林に対する意識調査を長年実施、日本人の自然認識、森林と文化に係わる多くの論文・著作を発表。森林（もり）づくりへの国民の直接参加などを通じて、森林と人とが豊かな関わりを持つ、森林文化を土台に据えた２１世紀の新しい森林行政の基本方針を示すなど、森林・林業政策の策定に多大な貢献をしてきた。

第２１回（平成２２年）

伝統の技が生み出す木の文化

（受賞者）田中 文男 氏

我が国の木造建築を代表する重要文化財の修復・復元をはじめ、日本の木造建築の実践と研究を重ね、先人の知恵である木造建築の基礎となる「継手・仕口」技術の再構築など、我が国の伝統的な木の文化の技術の承継に大きな功績を残した。

また、技能スペシャリストの養成など、人材の育成にも力を注ぐとともに、木の文化や木材利用に係わる多くの著書を出版するなど幅広い活動を通じ、長年の知識・経験を通した我が国の伝統的な木造建築の技術の継承に大きな役割を果たした。

第２２回（平成２４年）

「水と緑と土」は、豊かな自然の原点

（受賞者）富山　和子　氏

森林・林業の多面的機能を評価し世に訴えるなど、水と農林業に係る社会科学と自然科学双方からの幅広い研究は「富山学」と呼ばれ、著書『水と緑と土』（昭和 49 年）は環境問題のバイブルとして 38 年のロングセラーである。

国民共通の財産である森林づくりをいかに進め、次代に引き継ぐべきかについて検討する委員会に参画し、「21 世紀へ、国民参加の森林づくりを」（昭和 61 年）の提言の作成に尽力するなど、国民の森林・林業への認識の深化に寄与し、山村の人たちの自信や意欲の高揚に貢献した。

さくらは日本のシンボル～大震災からの復興の励みに～

（受賞者）佐野　藤右衛門　氏

「桜守」（さくらもり）として全国各地で桜の植樹活動を推進するとともに、桜を通じて自然や生活環境の変化、日本人の心の変化を問いかけ、樹木の保護・保全の啓発に貢献してきた。

日本を象徴する花として人々に親しまれ、花の美しさ、生命力の強さから日本人の精神の象徴としても取り上げられてきた桜が、東日本大震災の被災地において、復興への希望と励みのシンボルとして次々と植栽されており、日本人の心を癒す桜を守り・育ててきた。

第２３回（平成２５年）

日本の山から明るく豊かな展望の到来を願って

（受賞者）島﨑　洋路　氏

「島﨑森林塾」を立ち上げ、「山造り賜ります」と自ら出かけ、森林の調査・森林施業の計画をはじめ、現場作業のできる多くの若い技術者（山守）の育成と山林所有者に山造りのノウハウを伝授し、全国各地で活躍する多くの実践的な森林ボランティアを育成してきた。

その一つとして島﨑メソッドを応用して展開されている「森の健康診断」は全国各地への拡がりをみせ、大きな運動となっており、全国各地で活躍する実践的な森林ボランティアを数多く育ててきた。

第２４回（平成２６年）

「森林（もり）の力を地域の力に」の実践を目指して

（受賞者）中越　武義　氏

地域づくりの基本を、環境・健康・教育とし、特に森林を活用した森林セラピー基地の指定に尽力した。また、風力発電を設置し、売電収益を環境基金として積み立てて森林整備等に還元させる取組み、さらには、地域の森林資源の循環利用を目指し、「ゆすは

らペレット（株)」を設立や公共施設への町産材の積極的利用を図るなど「森林資源を総合的に活かした地域行政の展開、地域振興」へ寄与してきた。

第２５回（平成２７年）

「森は海の恋人」運動の実践を通じ豊かな日本の未来を目指して

（受賞者）畠山　重篤　氏

海の環境を守るには、山間部の森を守ることが必要との考えから、漁師仲間とともに室根山で、広葉樹の植林活動を開始し、これまで20 年以上にわたって継続してきる。また、「人々の心に木を植える」ための活動として、環境教育を実践し、子供たちに自然を感じ、自然を知る機会を提供。現在は、京都大学の社会連携教授も務め、自然生態系の連環についての探究を継続し、豊かな海を守るために森を大切にするという活動を拡げている。

第２６回（平成２８年）

「森の再生」と「心の再生」－豊かな森が持つ可能性を信じて－

（受賞者）C.W.ニコル　氏

昭和 61 年、長野県黒姫山麓に荒れ果てた里山を購入し、その里山を「アファンの森」と名付け、森の再生活動を開始。その活動を全国展開するために、平成 14 年、「C.W.ニコル・アファンの森財財団」を設立し、現在では、その森に、絶滅危惧種が 56 種確認されるほど多くの生物が生息する森に回復した。

さらに、森が人間の心体へ与える良い効果を提唱し、児童虐待などで心に傷を負った子供たちを森に招く活動を実践するとともに、全国各地での講演等を通じて、森の大切さ等の普及啓発を精力的に展開している。

地域資源とその機能を最大限に活用した地方創生

（受賞者）岩手県　葛巻町

葛巻町のキャッチフレーズは、「ミルクとワインとクリーンエネルギーのまち」。牧場・農場を活用したグリーンツーリズム、山ぶどうを原料にしたワインの生産。さらに、町の森林資源を活かした木質ペレットの生産など地域資源を有効利用する実践的方法の開拓と自然循環型社会の構築に取り組んでいる。

葛巻だからこそできる、葛巻しかできない「地方創生」に果敢に挑戦し、「全国の山村のモデルとなるまちづくり」を目指すその実践は高く評価される。

第２７回（平成２９年）

再生産可能な未来のエネルギーの礎を築く

－木質バイオマス利用と農山村の振興への願いを込めて

（受賞者）熊崎　実　氏

氏は、熱帯林問題や地球温暖化問題と向き合い、その後、木質バイオマスのエネルギ

ー利用に焦点を絞って精力的に活動し、講演会や現地指導など通じてその普及に努めてきた。

森林資源に恵まれた日本でも木質エネルギーを増加させるポテンシャルは決して小さくないとの考えの下、中山間地域において、地場資源で「エネルギー自立」を図りながら、雇用を増やすとの目的で各地における取組の支援活動を行っている。

時代とともに氏の研究のテーマは変わってきたが、終始国際的な視野で問題を捉え、解決策を探るという姿勢は一貫して変わっていない。

第２８回（平成３０年）

森が育む幼児の力

（受賞者）佐藤　清太郎　氏

佐藤清太郎氏は、秋田県を代表する林業者の一人である。

一方で、昭和５０年代前半から所有山林を解放して森林・林業体験などを実施しており、平成３年には「秋田森の会・風のハーモニー」を設立し所有山林の一部を会員に開放している。

さらに、子どもたちの生きる力を育む「森の保育園」を実践し、秋田県内の幼稚園・保育園21施設から延べ3、000人の子どもたちが雨の日も雪の日も訪れている。今は各地に広がりつつある「森のようちえん」などの草分け的存在である。

（受賞者）ＮＰＯ法人　森のようちえん全国ネットワーク連盟

１９５０年代にデンマークで始まった「森のようちえん」は、子供たちを森の自然の中で過ごさせ、心と体の発達を促そうというもので、日本では平成１２年ころから、父母の主的な活動として始まり、現在は行政の支援も広がりつつある。

活動の基本である「森のようちえん全国交流フォーラム」は、森林・自然を舞台にした幼児教育・保育・子育て支援の実践や制度・政策などをテーマに数百名の規模で開催している。

また、「森のようちえん指導者養成研修会」や、「森のようちえんカフェ」の開催など、森のようちえんの質の担保や社会での地位の確立に向けて日夜精力的に取り組んでいる。

第２９回（令和元年）

森林科学の未来を拓く

（受賞者）木平 勇吉 氏

木平勇吉氏の研究は、一研究分野にとどまらず、流域管理や地域の合意形成、ニュージーランドの林業、リモートセンシングや森林ＧＩＳなど多岐に及び、視点は、常に新たな分野へと向いており、挑戦的かつ創造的な業績を残した。これらの業績は、オリジナリティあふれる多くの著書によって世に広められ、森林科学全般の発展に大きく貢献してきた。

また、学術分野にとどまらず、丹沢大山自然再生委員会の委員長、「子ども樹木博士」の運営、「間伐・間伐材利用コンクール」審査委員長など幅広い領域において永年にわたってリーダーとして活躍してきた。

第３０回（令和３年）

私は森林の案内人

（受賞者）田中　惣次　氏

田中惣次氏は、東京都檜原村で約 500 ㌶の森林を所有し、江戸初期から続く林家の 14 代目として路網整備や新技術の導入による森林施業に積極的に取り組み、循環型の森林経営を行いつつ、その技術等広く普及するとともに、多くの人々に所有森林を提供しながらボランティア活動を支えるなど、幅広い実践活動を通じて森林・林業関係者等に貢献しており、多くの林業者等の模範となっている。

第３１回（令和４年）

市民・女性の視点で森林づくりを広める

（受賞者）池谷　キワ子　氏

池谷キワ子氏は、五日市地域の一角、養沢地域に生まれ、４０年前から林業を継承する一方、森林インストラクター、森林評価士、都林業普及指導協力員の資格を取得し、森林・林業の管理・経営の現場に従事するとともに、多くの提言を発信してきている。

氏の取り組みは、東京都、ひいては、我が国における市民参加による森林づくりの発展の基礎を築くとともに、市民グループの育成のきっかけとなっている。